



柿 妙林

TOPIC 01 「粧」マジック 心身の健康と元気を応援

2023年の海外研修では特に長寿の人々が多く住むブルーゾーンのひとつイタリア・サルデーニャ島を訪れました。その学びから、2024年は「YOSOOU」粧をテーマに、佛子からJCOCAの職員3人が資生堂の化粧品「化粧品」資格を取得し、活動しています。

※高齢者に対して化粧品を売りたいだけでなく、日常生活動作(A・D)の維持を目標としています。

3人は普段は各自の拠点で活動していますが、8月10日やクリスマス等は合同でメイクコーナーを設け子どもや利用者さんに「粧」楽しさを伝えています。能登半島地震後は被災地でも活動。発せられる雰囲気ではないと思いましたが、理事長の後押しもあり、化粧品を売った方々にスキンケアやメイクを行ったところ、とても喜ばれました。そこで、8月からは輪島カブレットの高齢者サービスで講座を定期開催。皆さんの表情が明るく、気持ちも前向きになる様子が私たちも元気をもらっています。(Share金沢 小西香織)



資生堂ジャパン株式会社
美容戦略部
社会活動企画推進グループ
中部エリアソーシャルエリアリーダー
伊藤 由美子さん



小西 香織 (Share金沢)
加治 あゆみ (里が岡牧場)
増田 春菜 (JCOCA南部)

11月には輪島の仮設住宅で開催された資生堂の美容教室に参加。ご縁から、今春に奥能登で行われる教室まで連携することになりました。今後はセラピスト職員を増やし、活動地域に広げていきたいと考えています。ぜひ皆さまも参加ください。

3人の対応力に感心しました。初対面の参加者と目標を合わせ、ご自身でできるように寄り添いサポートする姿勢は日頃の職場で培ったものと感じました。一緒に能登「化粧品」の魅力を届け、笑顔の花を咲かせる活動を楽しみにしています。

TOPIC 02 能登町白丸地区の 休耕地を活用した さつまいもプロジェクト

能登町白丸地区では、少子高齢化や農業従事者の減少により、長年放置されていた畑がありました。昨年元日に発生した能登半島地震は、住民や建物だけでなく、地域の主要産業である農業にも大きな被害をもたらしました。

これを打開するため、休耕地を利用したさつまいも栽培プロジェクトが始動。3年間で約3億円の収入を目標に、地域経済の活性化と農業の復興を目指して地元の高齢者、障がいのある方、引きこもりの方々が協力し、18ヘクタールの畑でさつまいもを育てています。

プロジェクトには、地元の能登高校や石川県立大学の学生も参加し、農作業を体験しながら農業の大切さや魅力を学んでいます。活動を通じて、将来地域の農業を担う若者が増えることを期待しています。また、地元企業と連携してお菓子や加工品を開発し、能登町の特産品として販売する取り組みも進んでいます。

このプロジェクトは、地元の人々が収入を得るだけでなく、地域に貢献する場を広げています。震災で被害を受けた能登が活気を取り戻し、住民が再び笑顔で未来に向かって歩むことを願っています。

(日本海農業部長 佐竹中蔵)



日本フロンティアロープ協会
休耕地活用等事業
「農福連携による共生社会創出事業」

発行
妙林 83号
社会福祉法人 佛子園
石川県白山市北安田町58番地2
TEL 076-275-0616
MAIL headoffice@bussien.com
P http://www.bussien.com
発行日 令和7年2月10日

表紙
スペインの奇祭「ラトマティナ」。
主催者も参加者も地域住民も驚かす盛り上がり。
2024年度海外研修より

ありがとうございます

大友福祉振興財団の助成により、輪島KABULETのグループホームにAEDを設置しました(7つ)。

日本財団「能登半島豪雨に
関わる子どもの教育・福祉
関連環境整備」事業により、
親子の居場所を整備。

株式会社YOLO工房様より仮設住宅や町の見回りに、Honda CROSS CUB(クロスカブ)50を2台無償貸与。

㈱アネビー様よりプランコ寄贈。

ARIGATO, NOTO

能登は、ひとりじゃない

「ありがとう。」をひろげよう

災害に限らず大きな困難に直面したとき、人の心は3つのステップをたどります。最初は「否認」。「なぜこんなことになったのか」と現実を受け入れられない段階です。次は「自然災害だから仕方ない」と少しずつ受け止めが進む「受容」。そして3つ目が「感謝」。困難な状況の中でも自分以外に心に向けてるときに生まれます。

感謝にも3つのステップがあります。

- 1 親切(支援)への感謝 …… 炊き出しや泥かきといった具体的な助けに「ありがとう」と感じる。
- 2 日常への感謝 …… 水道や電気が使える、近所のお店が営業を再開するなど、当たり前と思っていた日常のありがたさに気づく。
- 3 逆境への感謝 …… 厳しい状況を乗り越えた経験や学びに感謝する深いレベル。

私たちは災害という大きな困難を受け止め、「感謝」のステップに進みます。2025年の佛子園のテーマは「ありがとう」。皆さまとともに、「ありがとう」をひろげ、創造的復興への道を拓いていきます。



感謝の3step 1 親切への感謝 2 日常への感謝 3 逆境への感謝 感謝の心を未来へ

NOTO, NOT ALONE から ARIGATO, NOTO へ



観天望気

忍者といえば、かつて情報を操る達人だった。自然と共に生き、敵の動きを察知し、影の中で行動する。その知恵や技は、己の経験と感覚に基づき、生き残るための地道な工夫と戦略が求められた。令和の時代、膨大な情報が瞬時に飛び交う世界で、人々はスマートフォンやAIに頼り、情報取得のスピードを競い合う。この急速な変化の中で、私たちは情報に振り回されていくのか。AIの分析結果に依存しすぎることで、本来の思考力を失う危険性もある。この日、伊賀市で行われた次世代リーダー育成研修では、街の各所に潜む忍者をわずかなヒントを頼りに情報を駆使して探し出すというフィールドワークが行われた。ヒントは少なく、街並みは広い。わずかな手がかりに目を凝らし、現場を歩く中で、自然と知恵が働く。身体を張って忍者に扮しているのは何を隠そう法人理事の皆さんであった。苦学、AIと人間の共生とは何か。いにしへの忍者たちは、情報を得た後は周辺の様々な情勢を鑑み、自らの運命をかけて独自の判断を下していた。現代においても、最終的な判断は人間が責任をもつて行うべきものだ。AIは道具として活かすのではなく、使いこなし進化させるものだ。膨大な情報の渦中で、私たちは何を学べようか。次の時代を切り開くためには、忍びのように静かに我慢強い知恵が必要となる。当然、我慢強くという以上は、「今更AIはいいよ」と好き嫌いといった場合ではないということも覚えて付け加えておこう。

(良)

人的支援を継続くださっている富山県の「社会福祉法人セーナー苑」さんにお話をうかがいました。



右から
苑長 車谷市朗さん、
地域総合支援部長 加藤暎子さん、
こだまの丘支援員 村上竜馬さん、
こだまの丘支援課長 石田憲一朗さん

「人的支援の継続と「ボランティア休暇」創設

苑長の車谷さんは、富山県知事障害者福祉協会の会長として人的支援を推進。災害直後には職員を業務として派遣しました。職員は毎日活動を報告し、終了後は苑内で報告会を実施。この一連のプロセスが被災地へ入る職員の心理的ハードルを下げ、参加者が返り、人材育成にもなった」と振り返ります。

まずは身近な人に伝える
加藤さんのお母様は、「自分は被災地へは行けないが、できることで応援したい」と、ビールのラベルや蓋を活用してオリジナルグッズを手作り。加藤さんも自分ができるのは伝え続けることと、一緒に応援の輪を広げています。



セーナー苑祭で、職員の方お手製のチラシで盛り上げてくれました。

「能登は、ひとりじゃない」への共感と応援

10月のセーナー苑祭では「NOTO, NOT ALONE」専用ブースを設置してPR。デザインがおしゃれ「ロゴ」が

支援を通じて生まれる感謝の連鎖

「人生で初めてボランティアに参加できた。ご縁」に感謝と語る村上さん。石田さんは「ボランティアに来て、世界が広がった。学びに感謝、加藤さんは「佛子園の施設を訪問し、事業を知ることができた。出会いに感謝」と話します。そして車谷苑長は「多くのスタッフが手を挙げてくれた。本当に嬉しい」と職員への感謝を伝えました。能登を通じて、「ありがとう」が広がっています。



母様の手づくりグッズ。

ごちゃまぜはフェーズフリー

フェーズフリー(Phase Free)とは、平常時と非常時のフェーズ(社会の状態)の境界をなくし、身のまわりのものやサービスを日常と非常時の両方で活用しようという考え方です。今春、能登にオープンする「コミュニティセンター(コミセン)」は、「いつも」と「もしも」をフリーにして、ごちゃまぜで未来を築くための拠点です。

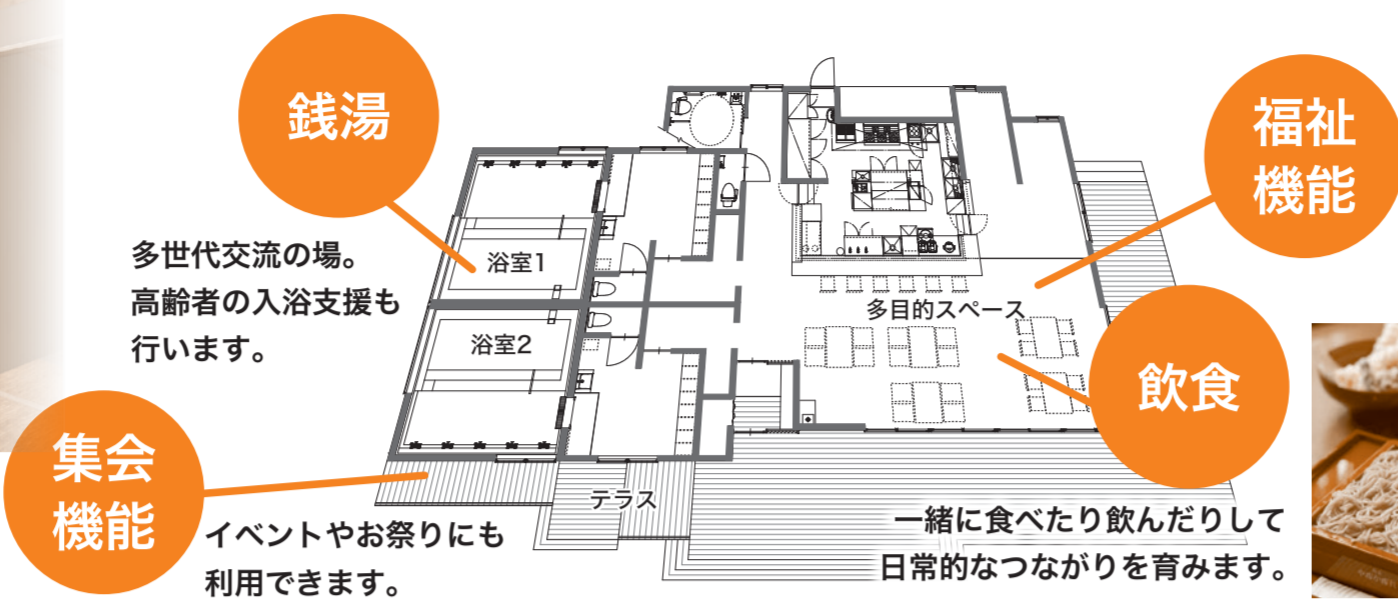
参考：(一社)フェーズフリー協会



集会から食事、福祉サービスまで行う多目的空間(イメージ)。



マリントウンコミセン(イメージ)



「コミセン」は、地域の皆さんが元気になり、明日の能登を創り上げるための要素が満載です。

図2「地域で困っている人をあまり助けようと思わない・助けようと思わない」理由

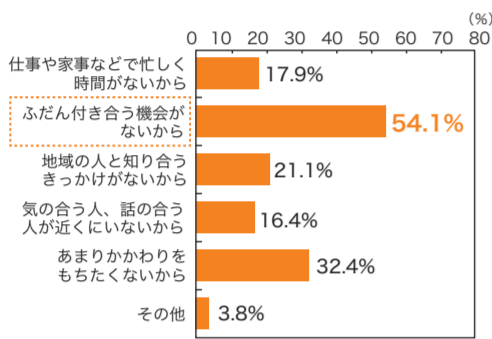
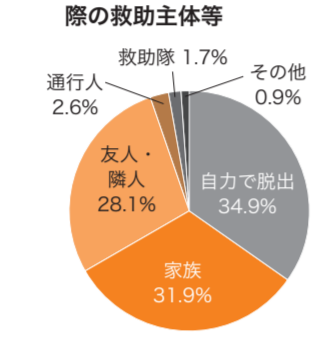


図1 阪神・淡路大震災における生き埋めや閉じ込められた際の救助主体等



★地域のつながり

災害時に助けてくれるのは、家族の次に「友人・隣人」(図1)。一方、「地域で困っている人がいたら助けようと思いませんか?」という質問では、「助けようと思わない(10.6%)」と答えた人の最理由が「ふだん付き合う機会がないから」(図2)でした。つまりお祭りやイベントも含めた日ごろの関係性が非常時の支え合いにつながります。



2018年の開設以来、輪島カブレットは、世代や国籍を超えた「ごちゃまぜ」のコミュニティを育んできました。それは住民の主体的な関与を促し、「支援する側」と「支援される側」を超えた相互依存の新たなモデルを生み出しました。発災後、自ら被災しながら、カブレットの復旧に駆けつけた住民たち。その姿は、「ごちゃまぜ」が育むコミュニティの可能性を示しています。



「地域のつながりが力に」
「地震の前から、集まっていた」

輪島KABULET(カブレット)は、能登半島地震の発災後13日、奥能登豪雨からは12日で温泉を再開。この迅速な復旧を支えたのは、日ごろから地域住民と築いてきた「支え合い」の関係性。日常的なつながりが、災害時に地域全体の大きな力を引き出したのです。

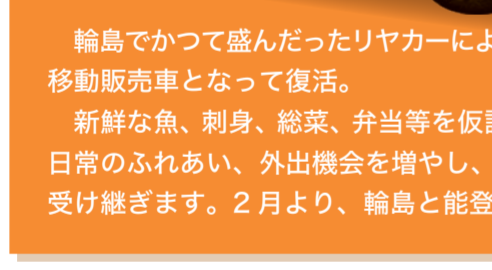
部屋にこもってられない! すごいマシンがやってくる



町野と宇出津のコミセンにはウェルネス施設を併設し、健康維持と機能改善に定評のある「鍛錬」のマシンを導入します。年齢や怪我、病氣などで諦めていた方々の「また元気に体を動かせるようになりたい」という願いのために開発された画期的なマシン。腰痛・肩こり・膝痛・五十肩・ぎっくり腰・姿勢矯正など、若者男女問わず効果を発揮します。

実際に試したスタッフも、「腰痛が和らいだ」「肩が楽になった」と驚きの効果を体感。運動が苦手な方や高齢の方も楽に使用、使うたびに「歩きやすくなった」「体が軽くなった」と嬉しい変化があるから、気づけばマシン目当てに、外出が増えること間違いなしです!

GOTCHA!WELLNESS各店に導入決定!
2/27(木)白山店、小松店を皮切りに、駒ヶ根店、岩沼店に順次マシンが入ります。



輪島でかつて盛んだったリヤカーによる魚の「振り売り」が、移動販売車となって復活。新鮮な魚、刺身、総菜、弁当等を仮設住宅へ届けながら、日常のふれあい、外出機会を増やし、地域の文化を未来に受け継ぎます。2月より、輪島と能登町をまわります。

「あとから来る者のために」

「あとから来る者のために」
「あとから来る者のために」
種を用意しておくのだ
山を川を海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
みなそれぞれ力を傾けるのだ
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれが自分のできる
何かをしてゆくのだ
(坂村 真民
1909-2006)

ふるりと行けば誰かと会える場所

堀田：鴻巣地区から入居された皆さんは、集会所で飲み会をされていましたね。
歌見：年末には大盛り合い、新年早々に区長交代もあって、予約や弁当手配といった準備はありましたが、大人数だったので集会所が使えて助かりました。
堀田：行事があるときだけでなく、いつでも触れ合える場所があるといいですね。炊き出しに行くとか、ご無沙汰している人にならばつり会えたりするの嬉しい。コミセンも、そういう感じになれば。
※能登地震では従来のように抽選ではなく、地域ごとに回って仮設住宅へ入居したため、仮設団地内でも出身地域ごとに隣接して生活されています。

コミュニティの可能性

歌見：鴻巣地区では、春祭りや秋祭り以外にも田起こしや草刈りなど、集まる機会が多かったです。会って、食べて、騒いで。
寺田：同じことを一緒にやることで共通言語が生れますから、仮設の定期清掃もみんなで行くといいですね。
歌見：いいね、知らない人同士でも「炊き出し」が共通の話題になっています。何時に帰るよ、とか。
堀田：私がいた朝市周辺はもともと集まる習慣があったから、近所づきあいには地域性があります。
堀田：仮設にきて初めて顔を合わせた人も多かったです。ようやく知り合いが増えました。
堀田：自治会も立ち上がったので、きっかけを上手につくって、コミュニティづくりを進めたいですね。

★災害関連死

避難生活の疲労やストレスで体調を崩して亡くなる「災害関連死」の概念は、1995年の阪神・淡路大震災を契機に生まれました。中越地震や熊本地震、能登半島地震では、建物倒壊などによる「直接死」を上回っています。

大震災の死者数

地震	直接死	災害関連死
中越地震(2004)	16人	52人
熊本地震(2016)	50人	218人
能登半島地震(2024)	228人	298人(2025.2.6)

熊本地震の災害関連死の主な原因

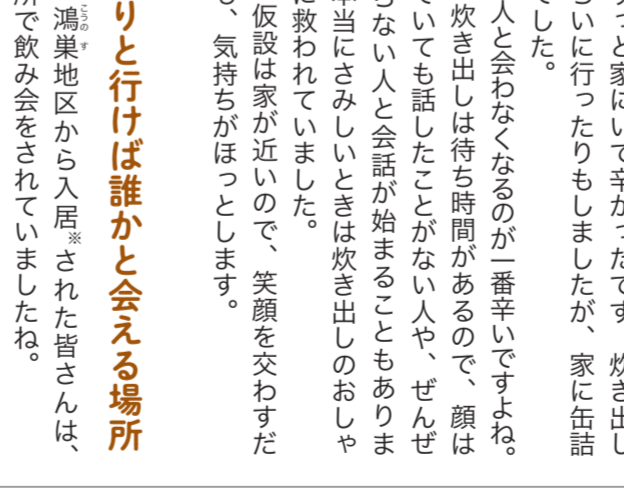
出典：内閣府 HP

原因	人数
地震のショック、余震への恐怖による肉体的・精神的負担	112
避難所生活などの肉体的・精神的負担	81
医療機関の機能停止などによる初期治療の遅れ(転院、既往症の悪化など)	46

5つのコミセンが今春より順次オープン

- 1 門前
- 2 鳳至
- 3 町野
- 4 宇出津
- 5 門前

これまで能登には輪島カブレットはひとつしありませんでしたが、コミセンによりミニカブレットともいえる「ごちゃまぜ」の場が広がります。コミセンからフェーズフリーなコミュニティが生まれ、明日の能登を創り上げます。



日本財団：令和6年能登半島地震に関わる「憩いの場」の新規開設と運営事業

全国初の福祉機能を備えた復興拠点

被災で生活環境が変化し、外出の機会が減少した方も少なくありません。特に高齢者は日中家に閉じこもりがちが多いです。私たちは日常的な福祉サービスこそ災害時にも必要とされる支援であり、災害関連死の予防にもなることを訴えてきました。それが実を結び、内閣府と厚生労働省が連携し、仮設住宅団地に福祉機能を有する拠点(ミニコミュニティセンター)の設置が決定したのです。

能登に広がる「ごちゃまぜの輪」

これまで能登には輪島カブレットはひとつしありませんでしたが、コミセンによりミニカブレットともいえる「ごちゃまぜ」の場が広がります。コミセンからフェーズフリーなコミュニティが生まれ、明日の能登を創り上げます。

座談会 明日の能登をつくらう

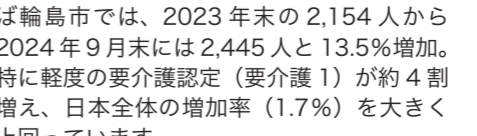


出席者：後列中より時計回り／堀田和夫さん(自治会・会長)、寺田誠(輪島 KABULET 施設長)、堀田裕見子さん(班長)、歌見信子さん(班長)、堀田直輝(JOCA 理事・災害支援担当)。座談会は1月9日に輪島カブレットで実施。

みんなで見守り合う場所に

歌見：元気がなくなった90代のおばあちゃんが運動不足で足が上がりなくなりました。震災後は景色が変わって道が分からなくなり、一人で外出できなくなってしまっていました。寺田：そういう方こそ、コミセンを使ってもいいですね。毎日お風呂に来るだけでもいいです。
堀田：仮設を巡回していると、お風呂は足腰の問題だけでなく、一人だと不安で使えないという声も聞きます。
堀田：コミセンは安全確認の意味でも有難いですね。

輪島市の要介護・支援認定者数(各月末)



★要介護・支援認定者の増加
能登半島地震の影響で、被災自治体では要介護・支援認定者が急増しました。例えば輪島市では、2023年末の2,154人から2024年9月末には2,445人と13.5%増加。特に軽度の要介護認定(要介護1)が約4割増え、日本全体の増加率(1.7%)を大きく上回っています。

ミニ輪島KABULETのような存在に

寺田：震災後、輪島カブレットで始めた一人用のお惣菜やお刺身販売が好評で、ショーケースの前に自然と人が集まるようになりました。
堀田：干物を焼いてもらえるのも嬉しいですね。誰かと一緒に食べたくなりますね。
堀田：配食も、希望者には「コミセン」で一緒に食べていただけるようにしたいと思っています。
歌見：そういう仕組みがあると、自然に交流が広がります。

コミセンをみんなで創る

寺田：発災後、輪島カブレットに転職される方が多いです。助けられるだけでなく、自分も助ける側に回りたい。コミセンも住民の方が「働く」ことを通じて盛り上げていけたらと思っています。
歌見：年齢制限はない?(笑)
寺田：ないです。時間も午前中だけとか自由です。
堀田：人間は誰かの役に立つことが生きがいになり、喜びになるもの。
堀田：講座にも先生やスタッフ等、さまざまな形でかかわっていただきたいと思います。
堀田：知り合いが水引講座をしているけれど、けっこう人が集まるらしいよ。
寺田：住民の皆さんが「このコミセンは自分たちで運営する」と考えれば、どんどん面白くなるでしょう。
歌見：福島と橋爪：みんなで面白く考えたいね。完成が楽しみです。
寺田：堀田：創造的復興に向け皆さんと「ごちゃまぜ」で歩みたいと思います。これからぜひご意見を聞かせてください。

(取材) 藤原 悠